塗り壁の可能性を探る

まるでアート！進化する左官技術

知っておきたい左官のあれこれ

左官職人がコテを使って手際よく壁面に漆喰を塗っていく

伝統ある左官の歴史

左官とは、おもに建物の壁や床などを塗る職種のこと。その歴史は古く、起源は縄文時代までさかのぼるといわれている。その後、時代の流れとともに発展を遂げながら、城や神社仏閣、茶室、蔵などはもちろんのこと、一般住宅に至るまで広く用いられてきた。まさに日本建築を語るうえで、左官は欠かすことのできない伝統技術である。

近年は、施工が簡単でかつ工期の早いパネルやクロスなどの工業製品が主流となり、左官工事そのものが減少傾向にある。その一方で、塗り壁がもたらす自然素材特有の効果が見直されていることも事実。また手仕事ならではの風合いや意匠性も味わえることから、あえて住宅や店舗に左官を希望する人も増えていて、再び注目を集めている。

現代でも左官技術は新しい素材や工法を取り入れながら、建築のさまざまなシーンで活躍している。2020年に登録されたユネスコ無形文化遺産「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」の中に、左官が含まれていることも記憶に新しい。

同じようで違う左官と塗装

左官と塗装は、どちらも建築物の壁を塗ることに関してはよく似ているが、使う材料や道具、工法や技術が実はまったく異なる。

左官は、土やモルタル、漆喰、プラスターなどの壁材を、コテと呼ばれる道具を使って壁に塗りつけながら仕上げていく。コテの使い方次第で壁面の質感にオリジナリティーのある表現ができるが、熟練の技を要するため、仕上がり具合は職人の腕前に大きく左右される。壁材は自然由来のものが多く、調湿や消臭などさまざまな効果が期待できる。

これに対して塗装の場合は、ペンキなどの塗料で外壁や屋根などをローラーで塗ったり、スプレーガンを使って吹き付けて塗る工法を用いる。使用する塗料は高性能なものが開発され、その特性によって紫外線や雨風、温度変化、サビなどから建物を守る効果が期待できる。

種類豊富な左官コテを適材適所に使い分ける

塗り壁の種類と特徴

塗り壁は左官工事で仕上げる伝統的な工法。クロス張りや木質系の板張りなどの「乾式工法」に対して「湿式工法」と呼ばれている。継ぎ目のない壁面をつくることができ、自然素材を使うため安全性が高く、多くの性能も備えている。

土壁

土にワラや砂を混ぜて水で練ったものを塗り固めた壁のことで、古くから親しまれてきた。「京壁」とも呼ばれ、数寄屋建築や茶室に好んで用いられている。土の成分や砂の混ぜ具合によって、さまざまな色や質感が表現できるのが特徴で、「聚楽壁（じゅらくかべ）」や「大津壁」「錆壁」などが有名。調湿、耐火作用にも優れている。

漆喰

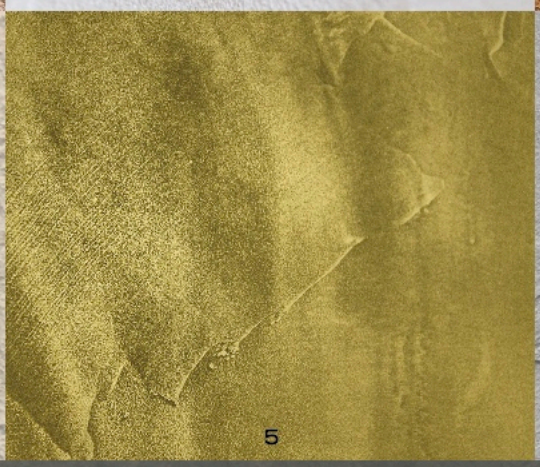
消石灰を主原料とした壁材で、スサや海藻糊をつなぎに加えて水で練ったもの。白く滑らかな質感が特徴で、耐火性能があることから城や蔵の壁に使われてきた歴史がある。強アルカリ性のため殺菌効果があり、カビや細菌に強い。またシックハウス症候群の原因となるホルムアルデヒドを分解する力を持つ。漆喰には細かい穴が空いており調湿、消臭効果にも優れている。

1

2

3

4


5

6

1 ワラや砂を混ぜた昔ながらの土壁　**2** クシ引きとラフなコテむらを塗り分けた漆喰壁　**3** 自然素材ブームの火付け役となった調湿効果の高い珪藻土壁　**4** ラフに塗ったモルタルのテクスチャー
5 樹脂に真鍮を混ぜた金属調磨き仕上げ　**6** 重厚な凹凸が特徴のスタッコ仕上げ

珪藻土

海や湖に堆積した植物プランクトンの一種である珪藻の殻からできている素材。珪藻土単体では固まらないため、凝固剤を混ぜて施工する。特徴は無数の穴がある多孔質で、調湿機能が非常に優れている点。消臭効果も期待できることから内装材としてよく使われている。

プラスター

プラスターとは、石灰や石膏を主な原料として鉱物質の粉末と水を混ぜ合わせた塗り壁。漆喰のように美しい白い輝きがあるのが特徴で、その仕上がりから西洋漆喰とも呼ばれている。

モルタル

セメントと水と砂を混ぜて練り上げたもの。これに砂利や砕石などを混ぜればコンクリートになる。外壁だけでなく土間の仕上げやタイルの目地、内壁の仕上げにも用いられる。グレーの無機質感がスタイリッシュな雰囲気を生むことから、店舗やデザイン住宅、リノベーションなどで人気。ひび割れや汚れ、水に弱いといったデメリットもある。

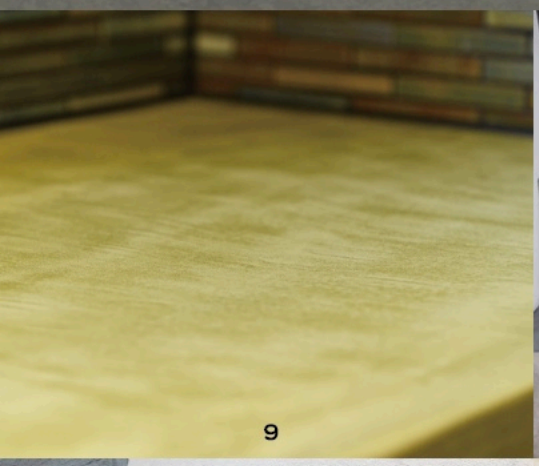
人気沸騰の新素材 モールテックスの魅力に迫る

左官業界に革命をもたらしたと言っても過言ではないモールテックスは、ベルギーで開発された左官材料。一見するとコンクリートやモルタルのような風合いを感じさせつつも、モールテックスはセメントに特殊な樹脂を混ぜているため柔軟性があり、ヒビが入りにくい性質を持つ。しかも1～3ミリほどの薄塗りでありながら、コンクリートの5倍の強度があると言われている。

防水性に優れているのも大きな特徴で、壁や床だけでなく、バスルームや洗面台、シンクなどの水回りにも施工できる。そのうえ接着性能が高く、塗る下地を選ばないからリノベーションにも向いている。テーブルやカウンターの天板、家具にだって施工が可能だ。

モノトーンの印象が強いが、実はカラーバリエーションが豊富なところも魅力で、インダストリアルテイストやモダンスタイル、ヴィンテージ風など、さまざまなニーズに対応できる。

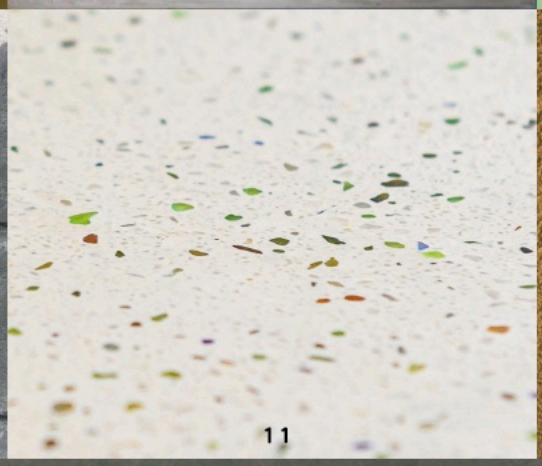
このように意匠性と機能性を併せ持った新素材は、今後さらに活躍の幅が広がる予感。ただしモールテックスを施工できるのは、認定を受けた職人に限られている。誰でも扱えるわけではなく、職人の腕前やセンスも求められる。


9

8

7

12


11

10

7 モールテックスは水をはじく特性を持つ　**8** モールテックス仕上げの無機質な階段　**9** カラーバリエーションが豊富なモールテックス　**10** 照明による陰影が楽しめる引きずり仕上げの漆喰壁
11 カラフルなビニールストーンや砕いた貝殻を骨材にしたポップな研ぎ出し仕上げ　**12** 石積みを表現した施工中のモルタル造形

壁面をデザインする

仕上げパターン

左官仕上げは職人が手作業でパターンを付けるため、オンリーワンの壁となる。熟練の技術でコテを自在に操り、平たく滑らかに仕上げることも、時にはあえてムラを付けたり、立体的な模様を描いて意匠性を楽しむことができる。

懐かしくて新しい

研ぎ出し仕上げ

砕いた石をセメントに混ぜ合わせて塗り固め、研磨機で表面を滑らかに仕上げる昔ながらの左官技法。学校や公共施設の手洗い場などでよく見られた。現在では機械が進化して固い石や玉石、ガラスなども研磨できるようになった。骨材やセメントの色を変えることで自由な色彩を表現でき、また曲線にも対応できることから、カウンターやテーブルの天板などの施工にも向いている。進化を遂げ、多くの可能性を秘めた研ぎ出し仕上げに注目したい。

非日常感を演出する

モルタル造形

モルタルを塗ってから固まるまでに道具を使って削りながら成形し、仕上げに塗料で着色をして、本物のように見せる技術。自然石やレンガ、タイル、枕木などをリアルに表現した、テーマパークに見る外国の古い街並みはその代表格。最近は店舗や住宅の外装や内装、ガーデニングなどでも身近に使われるようになった。

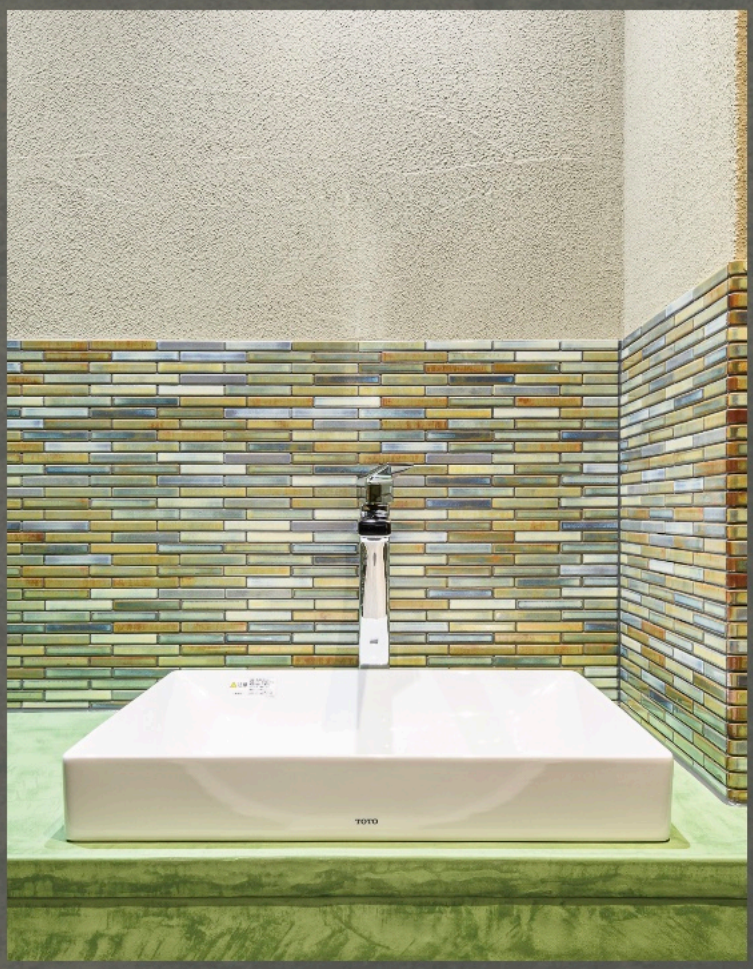
地層の放つパワーを纏い、土壁のぬくもりに包まれる

オフィスの役員室にふさわしい、高級感あふれる地層の表現力。間接照明の明かりが土壁に美しい陰影をもたらし金属調の壁面は黄金色に輝く

CASE-1
Executive room

右. 向かって右側の壁面はひび割れ仕上げの珪藻土
左. 天井はブロンズ色の金属調磨き仕上げ。樹脂に銅を混ぜた左官材を塗布した後に研磨してムラを出す。低天井と壁面はゴールド色

上・下写真．トイレのカウンターとミニキッチンのカウンターそれぞれに色の違うモールテックスを施工。コンクリートのような質感が得られモザイクタイルとの相性もいい



桐生の土を用いた土壁で地層を表現した塗り版築仕上げ。栃木県葛生の石灰を配合して色合いの差を出している

魅了されてやまない土壁の絶妙なグラデーション

CASE-2
Model House

左官仕上げをふんだんに取り入れた自宅兼モデルハウス。オリジナルのテレビ台は
薄塗りのモールテックスに研ぎ出し仕上げの天板をのせた

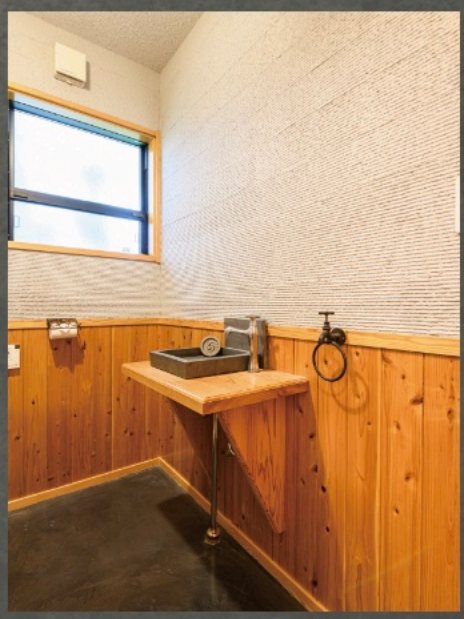
日本各地の土を使用した左官仕上げのアクセントウォール。着色はしておらず、土の持つ自然の色を生かしてその違いを表現している。

「おもしろいことにチャレンジしたい」。そう話すのは群馬県桐生市で左官業を営む野村左官店三代目の野村卓矢さん。掲載したオフィスやモデルハウスの内装を自ら施工した。

昔ながらの町並みや蔵が残る桐生は、最新技術よりも伝統技術を重んじる風潮にあり、家づくりにおいても木を使い、壁を塗り、省略を許さず手間を惜しまない工務店が今も多い。ふと東京に目を向けたら、華やかな商業施設に施された最新技術に心を奪われた。「新しい技術を地元に持ち込みたい」。その一心で東京へ赴き、多くの経験を積んできた。モールテックスの施工技術もそのひとつ。数年前までは地元で全く見向きもされなかったが、ここへ来てようやく声が掛かるようになったという。

もともと蔵の修繕や桐生の土を使った土壁仕上げを得意とする野村さんに、東京の設計士からオファーがあり、青山のショールームを手掛けるに至った。「東京の技術を取り入れることばかり考えていたのに、まさか桐生の土壁が採用されるなんて」と驚いたそう。

「左官は奥が深くやりがいのある職業。信頼できる若手を育てたい」と抱負を語る。広く国内外で活躍する職人や、左官をアートに昇華させ個展を開催するほどの名の知れた職人もいる。さまざまな可能性を秘めた左官のこれからに目が離せない。



左. 和のモルタル造形を玄関土間に施した。昔ながらのグリ石で基礎を造ったかのような表現をしている。　中. 折り上げ天井も左官仕上げ。赤茶色は福島の土、やや緑がかっているのは京都の土。その回りを珪藻土が囲んでいる。　右. トイレの壁は珪藻土のクシ引き仕上げ。床には炭が練り込んである。

<取材協力> 野村左官店　群馬県桐生市相生町3-585-22　http://nomura-sakan.com

<情報提供> 株式会社イケダコーポレーション　東京都中央区築地7丁目10-2　http://iskcorp.com